—資料紹介—

山口大学埋蔵文化財資料館所蔵の新羅系陶質土器について

福　島　朝　子

はじめに

ここに紹介する陶質土器は、小野忠凞氏（元山口大学教育学部教授）が光市大字室積に所在する山口大学教育学部光分校に勤務されていた昭和25年から30年頃、地元の方から寄贈を受けたものである。現在、山口大学埋蔵文化財資料館で保管されている。

本資料は、いわゆる新羅系陶質土器と呼ばれるもので、出土地は不詳であるが全国的にみても出土例が少ないためあえて紹介する次第である。

この土器は、頸部より上を欠失するがその形状からみて台付細口長頸壷と考えられる。頸部付根部分には削り出しによる段を有し、径4.2㎝と細く胴は張る。胴部最大径14.2㎝、底部径9.1㎝、現存高9.2㎝を測る。肩部は上に一条、下に二条の沈線によって三段に区画される。上・下段には上方の開いた円文と刺突文を組み合わせたスタンプ文がめぐる。中段には内側を右上がりの平行線で埋めた鋸歯文を施す。底部は丸味をおび、やや外方にふんばる高台を貼付する。回転横ナデによる成形で、外面の胴部下半には横方向の箆ミガキを施している。体部外面は青灰色を呈し、上半部にはオリーブ褐色の自然釉がかかる。底部外面は暗青灰色、内面は青灰色である。内面にかなり焼きぶくれが認められるが焼成は堅緻で胎土は精良。

この長頸壷の類品は、福岡県の王城山C－11号古墳付近[1]、京都府の大覚寺3号墳[2]、奈良県の石神遺跡[3]、千葉県の野々間古墳[4]から出土している。小田富士雄氏は、王城山C－11号古墳、大覚寺3号墳、野々間古墳出土の土器の時期をそれぞれ7世紀前半、7世紀初頭、7世紀後半以前と比定されている[5]。当資料館所蔵の土器は、文様や器形が大覚寺3号墳出土のものと似ており、日本で出土したものであるなら7世紀初頭頃のものであろう。

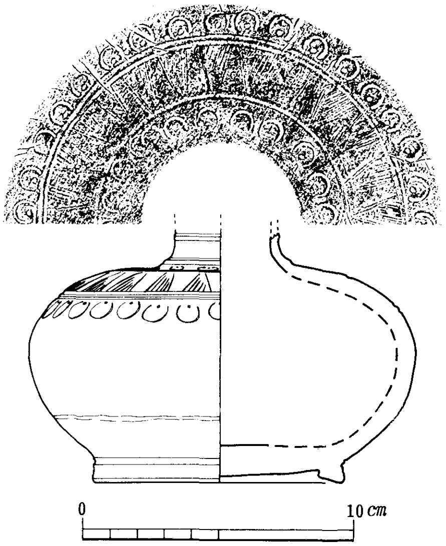


Fig. 53
埋蔵文化財資料館所蔵の新羅系陶質土器実測図

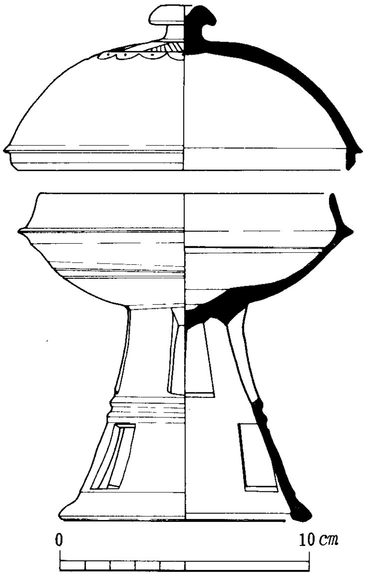


Fig. 54
光市長徳寺所蔵の新羅系陶質土器実測図

山口県内では、新羅系陶質土器とされる土器は豊浦郡豊浦町涌田に所在する心光寺一号墳[6)]から坏蓋3と坏身1が出土しており、そのうちの1組は有蓋高台付坏である。この古墳は6世紀後半の築造とされ、その他に鉄鏃、鉄刀子、耳環、鉄刀、鉄鉇、轡、棒状鉄器片が副葬されていた。

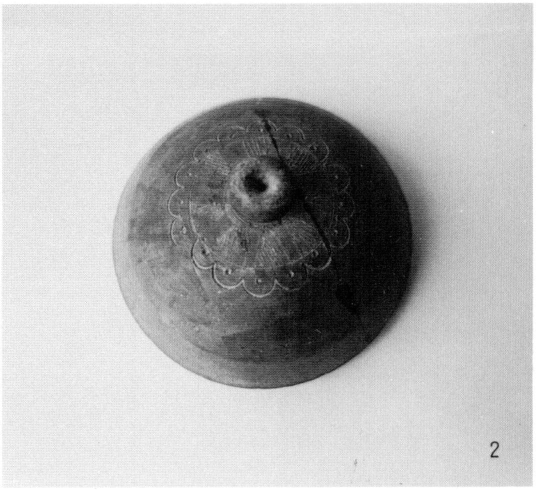
なお、左図の有蓋高坏は光市立野西庄にある長徳寺が所蔵されているもので、現在は消滅したが寺の付近にあった古墳から出土したという。蓋の口縁の一部を欠失するがほぼ完形である。蓋は全体的に丸味を帯びる。口縁部は段をなして屈曲し端部は尖る。つまみは直立し、端部を反転させ丸く終り中央部ばくぼむ。つまみの周囲には二本の沈線をめぐらしその間には内側を平行線で埋めた鋸歯文を、下段には半円の連続文様と刺突文を施す。文様は箆状工具によって施文されたと考えられる。坏部は浅めで、蓋受けは短く水平に突出し口縁部は内傾する。脚部の透かしは箆切りで、上下二段に交互に4個ずつ配置している。脚部中央には二条の突帯がめぐる。全体の成形は回転横ナデで蓋の外面中央は回転箆ミガキ、坏部の底部内外面には回転箆削りの跡が残る。色調は暗灰色を呈す。類例は慶州・味鄒王陵地区[7)]や昌寧校洞[8)]31号墳等にみられるが、これらとは文様の施文方法などがやや異なり新羅系陶質土器とは断定しがたいが今後貴重な資料になり得ると思われる。

〔注〕

1) 福岡県教育委員会「福岡県大野城市乙金所在古墳群の調査」(『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告Ⅸ』、1977年)。
2) 安藤信策「大覚寺古墳群発掘調査概報」(『京都府埋蔵文化財発掘調査概報』、1976年)。
3) 奈良国立文化財研究所『飛鳥・藤原宮発掘調査概報15』(1985年)。
4) 石井則孝「千葉県富津市出土の新羅焼土器」(『史館』第8号、1977年)。
5) 小田富士雄「対馬・北部九州発見の新羅系陶質土器」(『古文化談叢』第5条、九州古文化研究会、1978年)。
6) 山口県文化財愛護協会『山口県文化財第10号』(1980年)。豊浦町史編纂委員会『豊浦町史』(1979年)。
7) 注5)に同じ。
8) 定森秀夫「韓国慶尚南道昌寧地域出土陶質土器の検討ー陶質土器に関する一私見ー」(『古代文化』第33巻第4号、1981年)。定森氏の分類にあてはめるとⅡa類に属すると思われる。

なお、本資料紹介にあたって小野忠凞氏、長徳寺住職弘中泰彦氏、山本一朗氏、河村吉行氏、森田孝一氏に御配慮いただき記して謝意を表します。

1


2

3

新羅系陶質土器（1　埋蔵文化財資料館蔵　　2・3　光市長徳寺蔵）